

講義型授業における受講状態推定に関する研究

清野 悠希

昨今、大学等の教育機関ではファカルティ・ディベロップメント（以下FD）として様々な試みがなされており、授業の改善に対する取り組みが活発である。中でも、2008年の大学設置基準改訂に伴って組織的な授業改善の活動が義務化された後は、ほぼすべての大学にFDのための委員会が設置されており、授業に対する反応と要望の収集をさかんに行っている。

高等教育機関におけるFDでは、授業に対する評価をアンケート等を通して行うことが一般的である。アンケートによる調査では受講者の要望や主観的な感想・評価等を収集することができるが、一方でそれらの情報を授業に即時的に生かすことは難しく、実際に十分活かされていないといった報告も上がっている。また、授業評価のためのアンケート授業期間内に1回ないしは2回行うことが多いが、それらの結果が活かされることはアンケート調査の性質上困難である。

この研究ではより客観的、即時的な受講者の反応収集を目的として、受講者の受講状態のモニタリングと講師へのフィードバックを目的とした、受講状態判別手法時の提案を行い、アンケート調査との併用でよりきめ細やかな授業の反応収集をねらうものである。そのために、まず授業を受ける際、受講者がどのような状態をとりえるかを考え、その状態遷移のモデル化を行った。

結論としては4つの受講状態が定められ、それらの遷移のうち講師が必要とするのは「傾聴」の状態と「黙考」の状態の間の行き来であると結論づけた。これら2つの状態を外部からの客観的な測定で判別することができれば、講師への有用な情報のフィードバックが可能となる。

受講状態として設定した複数の項目のうち、2つの判別可能性を示し、この手法が受講者の反応収集のために有効であること確認する。

実験の中で受講状態を再現するため、オープンコースウェア等を利用してノートをとるなどの方法を試した。結果からは受講状態によってデータの振る舞いが異なることが確認できたが、具体的な指標については今後の研究で明らかにしてゆく必要がある。これにより、今後の継続研究によって授業評価のための手法の提案ができるという可能性が示唆された。

（指導教員 佐藤 哲司）